

郭上清先生全集

第Ⅱ期

第二十九卷

補遺
2

野上浩生子金糸

第Ⅱ期

第二十九卷

岩波書店

野上彌生子全集
第Ⅱ期 第二十九卷

第三十一回配本
(全二十九卷)

一九九一年八月三〇日 発行

定価五五〇〇円
(本体五三四〇円)

著 者 野 上 彌 生 子
の が み や え こ

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三三六五十二(案内)

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

評論・随筆・雑纂

『伝説の時代』例言	三
職業的婦人と妻	六
蓄音機の娘	三
古きギリシアの恋の歌	四
『ホトトギス』四百号	七
若い母への手紙	六
象のおはなし・二つ	三
どぶりん かちん ぱたん	四
不思議な旅	六
秋晴——尾上始太郎先生の思ひ出——	三

娘は母になる	四
桐の花のさくころ	五
ささんか	五
椎名剛美氏後援 日本画小品頒布画会	五
茶台ずし	五
ギリシア神話の星	五
「富士太鼓」御難の記	五
成長——ある日の日記から——	五
美はしき結晶	五
大分県立臼杵高等女学校校歌	六
「美しき世界」あとがき	六
大戦の前夜	七
石田布佐子著『巴里落ちまで』序	七
日本の母親	七
『婦人公論』巻頭言拾遺	八

デヴォルフさん	八
橋	七
エジプト旅行の回想	九
『木蔭の家』はしがき	五
婦 道	七
母 の 歌	一〇
人口疎開と学童の問題	一一
更に幅を広く	一六
〔無 題〕	一〇八
下掛宝生会演能解説(自然居士他)	一〇
〔木田文夫著『弱い子供の育て方』推薦文〕	二五
下懸宝生会能解説(鳥追他)	二六
素 一 へ	一九
下懸宝生会能解説(熊野他)	三二
下懸宝生会能解説(井筒他)	三四

内田さんのこと	一六
下懸宝生会能解説(百万他)	一六
下懸宝生会能解説(盛久他)	一三
〔矢崎夫人の絵画教室を開くにあたつて〕	一四
二人大名	一六
下懸宝生会能解説(清経他)	一五
下掛宝生会能解説(景清他)	一四
下掛宝生会能解説(桜川他)	一四
尊敬すべき実力	一四
『宮沢賢治全集』推薦文	一五
野上豊一郎著『能百句』あとがき	一五
春閑雑記	一五
故宝生新十三回忌追善能番組解説	一六
ドイツ強制収容所の体験記録	一三
歯車にもバラを	一四

目 次

山荘の書棚	一七
山ろく清談	一八
新しいお客さんの鞆	一九
ハラキリと物理学者	二〇
刃物は魔物	二一
奇妙な議員たち	二二
大宮人は暇あれや	二三
安保条約改定と颱風	二四
初心を忘るべからず——世阿弥『花伝書』——	二五
賢い認識を	二六
北軽井沢の新先生	二七
〔第三回プティ児童絵画習作展〕	二八
在りし日のこと	二九
『花がたみ』序	三〇
どんな組織にも囲い	三一

新しい家庭小説	100
『成城町271番地』序	101
筆者のことば	105
『面影 井本静子追悼録』序	106
海神丸を「人間」の題名において映画化するにあたって	108
『キルケゴール全集』刊行によせて	109
思ひいで	110
不死鳥のような古典	111
再発行をよろこぶ	113
学ぶということ	114
まことの読書	110
安倍さんをいたむ	111
黄金のメスをもつ哲学者	111
藤戸について	113
日本文化に打ちこむ独自の鋏	116

宮本百合子さんのこと——没後十七周年によせて——	三七
小さなホール	三二
〔無題〕	三六
空 也	三七
観世大夫の面影	三九
森の小鳥のこえ	四二
〔頌 新生 観世能楽堂〕	四三
未来の認識へ	四四
女流作家独自の仕事	四五
本統だと信じられること	四六
ギリシア劇との触れあひ	四七
日本文学への新鮮で重要な貢献	四八
今日の悦びの日をあらたな踏み台として	五一
一粒の真珠のやうな……	五三
寧ろこれから	五五

おもいで	二五
百合子さんのこと	二六
『改訳 マルクスの娘たち』推薦文	二六〇
鈴木さんと「赤い鳥」	二六一
「南山松竹図」のことなど	二六二
片山敏彦氏への手紙(抄)	二六六
古いおもひいで	二六八
『野上彌生子全集』刊行に寄せて	二七〇
弔 辞	二七一
思ひいつるまま	二七三
いよいよ大事な存在であつた彼	二七三
大岡さんのこと	二七五
いつの世のちぎりぞや	二七七
庭前の牡丹花	二八四
昔ばなし	二九〇

座談・対談

『夏の花』はしがき	二九四
バウム・クーヘンの話	二九七
天賦の業績	三〇三
処女作が二つある話	三〇四
世界は、その存在を保ち得るか	三〇六
思ひ出すこと	三〇八
遠くも来ぬるものかな	三二一

野上弥生子女史に聞く 懐しい明治の文学体験

〔聞く人 小堀杏奴・中里恒子・大田洋子〕	三七
西洋と日本〔対談 谷川徹三〕	三八
桜間弓川師を偲ぶ座談会	三七
伝統の花咲く未来を〔対談 朝倉摂〕	三七六
軽井沢清談〔座談会 谷川徹三・大島清〕	三八六

女の生き方	〔対談 羽仁説子〕	四〇九
-------	-----------	-----

日本と日本人	四二二
--------	-----

野上弥生子先生のお話	〔座談会 西谷啓治・大島康正・武内義範〕	四二五
------------	----------------------	-----

ふるさとの歴史と愛	〔対談 平松守彦〕	四三五
-----------	-----------	-----

「新しき女」と女性のキリスト像	〔対談 ドナルド・キーン〕	四三七
-----------------	---------------	-----

思い出すことども	〔対談 谷川俊太郎〕	四五九
----------	------------	-----

山荘閑談	四七〇
------	-----

書簡補遺

後記	七七
----	----

評論・隨筆・雜纂

『伝説の時代』例言

一、此書物の標題は原作の“Age of Fable”を其まゝ字通りに訳したのであります。而して此翻訳に用ゐた版は“Everyman's Library”(London: J. M. Dent & Sons)の中の此本であります。

一、翻訳に就いてのお断りを書く前に原作に就いて一つ二つ申上げて置かなければならぬ事があると思ひます。

一、原著者 Thomas Bulfinch 氏はボストンの人ださうです。此の『伝説の時代』の出来たのは一八五五年で、詩人 Longfellow に献本して書かれたものであります。此本の出来た謂はれに就いては原書の序文に委しく説明してあります。先づ神話の知識がなくては外国文学の大抵は了解することも鑑賞することも出来ないと言つて居ります。古い詩などは殊に然うであります。散文でも神話的知識を欠いては了解に苦しむものが幾らもあります。近頃の文学を読む上に於てもこの不自由を感じる場合は少くありません。と言つて此の忙しい時代には“Æneid”や“Metamorphoses”を読む暇ありません。仮りに読んだとしても予備知識がなくては『デュローの妬み』と云ふ言葉も、『パリスの裁き』といふ意味も、『ガニメーデのほまれ』と云ふ謂はれも分らない筈であります。それを知る為めには古典辞書といふ種類の便利な索引があります。けれども之は一つには事件を列べた丈で、読んでも乾燥無味であり、また二つには委しく叙述を尽すこ

との出来ぬと云ふ不便もあります。一例を挙げればセイクスとハルシヨーンの話などは古典辞書の中で最もよいと云はれる Smith の辞書を探しても、たつた八行ほか書いてありません。それがこの『伝説の時代』の中では或る一章を成して十五頁に互る面白い物語となつて居ます。斯のやうに興味を中心として戯曲化してありますけれども、一つとして希臘のオリジナルに抛らないで勝手な変更をしたものはありません。ホーマーとヴァージルとオヴィッドを土台としてみな出所の正しい抛り所を持つてゐます。また北欧の神話は Mallet の “Northern Antiquities” から殆んどそのまゝに採用したのであります。——これ文けが原書の出来た大体のいはれであります。

一、この本の翻訳は去年の秋の末から今年の夏の初へかけて、殆ど毎日の日課のやうにして、娛みながら読み且つ書いたと申すだけで御座います。

一、一番困りましたのは固有名詞の読み方でありました。初めは Gayley の Classical Myths に採用してある発音法に依つてクォンティティもアクセントも母子音の読み方も綴の反切法も全然それに随はうと思ひましたが、中頃から少からぬ不便を見出しましたから、初めの計画を変へて大体大陸風の発音法に抛ることと致しました。それ故普通の英語としての発音では黙語となるべき語尾の e 又は es も発音する事になつてゐます。例へば次のやうであります。さうして Niobe 及び Oréstes は共に三綴となり、Ariadne は四綴となります。而して読み方は羅馬字のそれに準じます。

一、けれども例外として日本で普通呼び慣らされてゐる字はその慣用的の読み方に従ひました。Venus はヴェヌスと読まずして英語風にヴィーナスと読みます。Neptune も三綴に分けずに矢